研究者、学生という枠もまた、われわれの人的接触の現実的範疇という意味以上の制約は不要である。

文革を経て、四人組後の中国の状況をどのように捉えていくか、50年代から60年代前半の文学状況、ひいては日本における現代中国文学研究のあり方についての総括は、現時点ではなお困難ではあるが70年代後半から今日にいたる状況を研究対象として見据えようとする時、後者の研究推進の中で前者の総括を同時進行させなければならないという思いから逃れ出せない。

生産責任制の実施を中心とする農村の新しい変化、都市労働者や知識人・青年が抱えるさまざまな思想状況、文学・芸術と政治・党との関係（ひいては文学者・芸術家の"自由"の問題）、当研究会がこうした山積する問題にどこまで喰いさがれるか、私以外のほとんどの会員の若さを考えてみると、それはそれで私の内部に微かな興奮をもたらしてくれるものである。

（1983．10．24

かまや・おさむ）

当代農村文学読書札記
―阿Qの影を念頭に―

はじめに

生産責任制、解体する人民公社、甦る家族経営――農村は急激に変貌をとげつつある。80年代に入ると、文革の傷痕を訴える文学はトーンダウンし、代って農村生活の変貌を描く作品が増えている。もちろん農村生活（の変貌）を描くことは、何も昨今に始まったことではなく、一貫して中国文学の大きなテーマの一つであったし、これからもそうあり続けるであろう。80年代に入っての特徴は一言でいえば、「生産責任制による」ということであろう。農村を題材にした作品は多くの場合、それにより人々にやる気が出て、農村に活気が戻ったことを描く。

責任田や副業で現金収入も増大し、万元戸も出現する。[①] 購買力がつくのに伴ない、物質的要求もそれに比例して増大する。また精神的文化的要求も高まる。[②] しかし、中国の農村は広大で、そこに息づく人々も莫大な数にのぼり、生

活も様々である。物質的精神的充足感が更に労働意欲をかきたて、全体の生産力アップにつながる、となれば問題はないのだが、必ずしもそうならないのは人間の世界だからであろうか。[3]

ところで、私にとって印象深い作品とは多くの場合、何よりも印象深い人物が登場する。そしてその人物はどこかに阿Qの生れかわりか、その分身あるいは阿Qの影をひきずっていると思われることがしばしばある。

例えば、「酒斗户主」陳奐生[4]が阿Qに似ていることは、一読した人は誰しも感ずるであろう。特に「上城」では、そのストーリーさえ『阿Q正伝』のいくつかの場面と重なるのを感ずるであろう。

陳奐生は副業で町に出かけ気分が悪くなる。気がつくと、県委員会招待所の「高級」な一室のベッド上である。おかげで彼は自分のほぼ一週間分の賃金に相当する5元を支払うことになる。それで手に入れたものは具体的な「物」ではなく、睡眠であった。彼の村の人達はこんな金の使い方をしたことがない。5元と引換えに具体的な「物」は何も残らないのである。妻への言訳にも困る。ところが、一泊5元もする「高級」な部屋に泊り、しかも県委員会書記の車に乗ったことで、村での彼の地位は急速に高まり、人々から一目置かれることになる。ちょうど阿Qが、未荘の人々が知らない町の見聞により、また趙旦那に殴られることにより、一目置かれるようになったように。更に陳奐生が帰途、妻への言訳を思案するくだりは、「精神勝利法」を彷彿とさせる。

伝統や習俗が革命によってもそう簡単に断ち切れないように、農民の発想や意識構造は以前とは決して同じではあり得ないが、また容易に変り得るものでもない。換言すれば、「阿Qは死なず」ということになるであろうか。阿Q自身が語ったように、「20年経ったらまた一人……」である。更に20年後の阿Qもまた言うかも知れない。

「20年経ったらまた一人……」と。

阿Qは姿形を変え時代を越えて生き続ける。

阿Qの届かぬ叫び

「阿Q精神」を代表するものは、一般に「精神勝利法」とされる。「精神勝利法」は、時代やその人の社会的地位に関係なく、程度の差はあれ、誰しも有しているものである。ただ表層に現れるとき、差異を生じるだけである。「精神勝利法はそれなりに論理的であり、生活の「知恵」ではあるが、やはりどちらかといえば、社会的弱者の奴隷的根情の発露である。もちろん「精神勝利法」だけが阿Qの特徴ではない。『阿Q正伝』の第3章までは確かに「精神勝利法」を説明する挿話が並べられているが、第4章あたりから、その枠をはみ出してしまうことは、すでに指摘がある通りである。[5]

阿Qは今世紀初頭の中国の未荘という小村の一雇農である。生産手段を自ら有しておらず、売るべきこれといった技術も無ければ、商品化できる学識も無い。ただ自分の肉体が資本であり、それを売ることによって生きている。しかも仕事を得ても長期的契約ではなく、短期の臨時雇いである。いつでも他人と取りかえがきくのである。その限りにおいて彼は雇主の気嫌を損ねないように生きていかねばならない。つまり阿Qは、その社会を支配する理論に逆らってはならない。謀反などもっての他である。にもかかわらず阿Qはそこに収まり切れないのである。

阿Qは、そしてその仲間たちや遺伝子の一部を受けついだ人々は、一般に社会の底辺に近いところで、人々にさげすまれながら生きている。決して現状に満足していないが、それを打破する具体的な方策を有しているわけではない。そしてそういう境遇にある自分が、いまある社会に実は半ば強制されていることを明確には自覚していないし、また自覚することが困難であるような社会構造の中で生きている。「精神勝利法」を完全にマスターしていれば、あるいは阿Qは死なずにすんだかも知れない。が、阿Qは処刑される。刑場に向っていることに気づいた阿Qに、いくつかのせりふが浮かんだものの、彼が発っした最後の言葉は、

「过了二十年又是一个……」

であった。しかもこの言葉は「从来不说的话」であった。ついに「救命……」は音声となって阿Qの口から発されることはなかった。つまり、まわりの民衆の耳には届かなかった。かりに届いたとしても、彼らには「助けて……」としか聞えなかったであろう。だが、私には「助けて……」と同時に、いや、それ以上に、「救え……」という響きが強く耳に残る。私は魯迅が連載を終えるために、阿Qの「死」をもってきたというよりも、この叫びにならぬ叫び「救命」を阿Qに叫ばせるために「殺した」と考えたい。

「郷場上」と馮幺爸

何士光「郷場上」⑥の馮幺爸は四十過ぎの農民であるが、名うての呑兵衛である。いつの頃か、農作業にもまったくやる気をなくしていた。村人たちからは、ほとんどその存在を顧られることはなかった。

その馮幺爸が梨花屯の郷場〔山村で市がたつなど人々の往来の比較的激しい所〕で子どものいさかいを目撃する。支部書記立ちあいのもとで、二人の母親の間に白黒がつけられようとする。証人は唯一の目撃者馮幺爸である。公平であるべき支部書記は一方の母親である羅二娘の肩をもつことを隠そうとしない。羅二娘はやたら威勢がよく、自信満々で、さっさと証言するように強要する。ところが馮幺爸の証言は、要領を得ないし、言葉も途切れがちである。照れくさそうな笑いを浮かべてはボサボサ頭をかくばかりである。もう一方の母親である、貧相な任老大の妻の姿が馮幺爸の優柔不断に一そう拍車をかける。四人を見守る村人たちは少々間のびして興ざめ気味であるが、馮幺爸には同情的である。しかし、馮幺爸は支部書記と羅二娘の陰陽の圧力をはねのけ、任家の子どもに非がないことを証言する。と同時に、自分の言葉をとりもどす。

「わしにそんな手は通用しない。あんたは汚ないやり方はやめたがええ。―わしを管訓班送りにするちゅうのか。大みそかに水利工事にやるって。それがどうした。あんたのやり方は通用しねえ。」

ぶいえがあらあ――お上は今度はまっとうだ。あんたはわしに対して何ができるというんじゃ。」

「お上のやり方がこれまでのように、あれこれちょこちょこ変りさえしなけりゃ、わしら百姓だって食っていけねえこたぁない。おいら馮幺爸にもやる気があらぁ。何もこわかねえ。」

馮幺爸がやる気をなくし、飲んだくれていたのは、そして一言「羅二嫁のガキが怨い」と言えばすむような証言にあれこれ悩み、ためらい、彼をちゅうちょさせたものは何か。それは馮幺爸の言葉からも推察されるように、もとをたどれば、お上（国家）のやり方（政策）そのものにも起因するのであるが、この梨花屯に限って言えば――何士光の小説の舞台はほとんどが「梨花屯」であるが[17]――政経一体となった「上層」による支配の構造であった[18]。

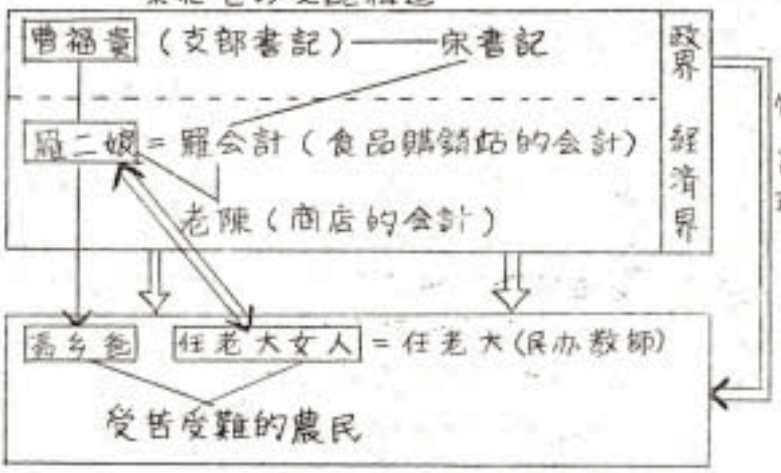
羅二嫁の夫は食品購銷站の会計をしており、唯一の商店の会計である老陳とツーカーの仲である。曹支部書記の背後には宋書記がひかえており、羅家からはそれなりの品物が届けられている。これら一握りのグループが小さな山村梨花屯の「上層」を形成している。そこで貴婦人とも呼ばれる羅二嫁に逆らえば、商店の対応はよそよそしくなり、日用品に事欠くようになり、ついには食う物にも困る事になり、場合によっては管訓班に送られることになる。

以前の馮幺爸は吾兵衛であるうえ「破産した、最も価値のない農夫」であった。まして羅二嫁にとっては彼など豚の腸でも与えておけば、言うことをきき、彼女に尻尾をふるしか能のない一匹の犬でしかなかった。もちろん、まず人々の話題にのぼることはなかった。阿Qが何か派手なことでもしでかさない限り、人々の話題にのぼることがなく、村をいったん離れてしまえば忘れられてしまうように。阿Qは居づらくなれば村を離れて、かっぱらいもできるが、馮幺爸の場合はそうもいかない。未荘よりも梨花屯の方が、半世紀以上経た七十年代の方が、支配の構造は巧妙なのである。

阿Qが最後に人々の耳目を集めるのは刑場への途上であった。馮幺爸の場合は、貴婦人の絡んださいな事件の証言の場であった。一見、時代も社会的背景

も、そこに至る過程も異なる。しかし程度の差はあるものの、どちらにもあるせっぱつまった状況で、人間としてゆずることのできない何かが問われ、そしてそれを見つめる複数の眼がある。阿Qの場合は狠のそれであったが、馮幺爸にはのぞき趣味以上に何よりも同情が寄せられる。そういえば「確かに、去年から馮幺爸はちがっていた。酒もそれほど飲まなくなったし、仕事もするようになった。あの大きな鼾放鼠は、去年の冬に新しく買ったばかりじゃないか。」と村人達は思いかえすのである。

しかし、窮地にたつ二人に作中の人物による救いの手は差しのべられない。馮幺爸自身が自らを解放するしかないのであり、事実それを実行に移すのである。その支えとなったのは、言うまでもなく生産責任制である。但し、「お上のやり方がこれまでのように、あれこれちょこちょこ変りさえしなけりゃ」なのである。阿Qの口からはついに発されなかった「救命,……」に続く言葉のうちのいくつかが馮幺爸から発せられたのではないだろうか。（あおたに・まさあき）

注①但し決して万万歳でないことは、陸文夫「万元戸」（人民文学83.4）②例えば、テレビをめぐる悲喜劇は、李志君「熊老旦和熊貴外」（人民文学81.10）張一弓「黒娃的新聞」（上海文学82.3）③協同作業等で喜びを分ちあう機会の減少や若者の無計画・無気力などについては、周克芹「山月不知心里事」（四川文学81.8）諶容「杳杳的月亮」（人民文学82.10）④陳奐生が登場する作品には、「"漏斗戸"主」（鍾山79.2）「陳奐生上城」（人民文学80.2）「陳奐生転業」（収穫81.3）「陳奐生包産」（人民文学82.3）⑤丸山昇『魯迅』P161~3⑥人民文学80.8 ⑦いずれ「梨花屯」ものをまとめるらしい。（文学報83.6.16）⑧図示すれば以下の通り。▭は実際の登場人物。

梨花屯の支配構造